

情報共有

非管理用

NISA 情報共有
管理

4枚

プラント状況 (本店レク) 議事メモ

日時：平成 23 年 7 月 14 日 (木) 11:00~11:45

場所：東京電力本館 3 階大会議室

先方：記者約 30 名 (カメラ 4 台)

当方：原子力・立地本部

原子力設備管理部

広報部

配布資料：

- ・ 福島第一原子力発電所プラント関連パラメータ (7月14日6時現在)
- ・ 集中廃棄物処理施設周辺 サブドレン水核種分析結果 (7月14日)
- ・ 福島第一原子力発電所 3号機原子炉格納容器への窒素封入の実施について
- ・ 福島第一原子力発電所 2, 3号機原子炉格納容器圧力の窒素封入ライン圧力指示計での確認について
- ・ 凝集沈殿装置薬液注入ライン損傷部の概略構造
- ・ 柏崎刈羽原子力発電所における津波対策の取り組み状況について

よりプラント状況、配付資料に関して説明。

質疑：

Q. 3号機窒素封入の実施方法に関して、原子力安全・保安院より妥当との評価を頂いたのは本日からか。

A. その通り。

Q. 本日午後8時から3号機の窒素封入作業を開始する理由は。

A. 窒素封入により格納容器から放射性物質が押し出される可能性については事前に評価を行い周辺環境に影響がないことを確認しているものの、念のため現場作業員が作業を行わない時間帯を選択した。なお、2号機の窒素封入時においても同様の時間帯に作業を行った。

Q. 窒素封入作業に関して、地元自治体等への連絡は実施しているのか。

A. 原子力安全・保安院より了承を得られたことは連絡している。作業開始する際には改めて通報連絡により地元自治体へご連絡させて頂く予定。

Q. 凝集沈殿装置薬液注入ラインの損傷箇所のように接続継ぎ手に樹脂を使用している箇所は何か所あるのか。

A. 今回の損傷箇所は7月10日に発生した箇所と同じ箇所であり、その他に同様箇所が1種類あるので、今回の箇所以外に2箇所あることになるが、既に改修済である。アレバ除染装置の上流側であり、薬液注入ラインである。

Q. 凝集沈殿装置薬液注入ラインの損傷箇所は切断されたとのことだが、完全に切断されたのか。また損傷箇所から漏れた水の量は5Lとのことだが、この値は正確なのか。

A. 損傷箇所は完全に切断されている。なお、漏えい量については、溜まっている水の量から5Lと判断した。多少正確さに問題があるものの、漏えいに気付いてからシステムを停止するまでの時間が短かったことも影響していると考えている。

Q. 損傷部分と同様の構造の箇所が他にもあるとのことだが、ステンレスに改修していなかった理由は。

A. 外観点検は実施しており交換する段取りを検討していたが、当該箇所が線量の高いエリアであったこともあり、結果的には交換作業に入る前に配管が損傷し漏えいが発生した。交換する必要性については認識していた。

Q. 漏えい箇所を補修して再稼働するまでの時期的な見通しは。

A. 配管内側にねじ込み部があり、接続継ぎ手部分が簡単に取り出せない状況であること、また当該エリアの空間線量が100~150mSv/hと高く、短時間で作業を終えるための段取りを検討する必要があること、等から未だ作業に着手できていない。本日には着手する予定。

Q. ベッセル交換後の一時仮置場のクレーンにも故障が見つまっているとのことだが、詳細は。

A. 車軸を止めている箇所に不具合があり、本日改修作業を行う予定。改修後ベッセルと交換する予定。

Q. 凝集沈殿装置薬液注入ラインの損傷箇所が直らないと水処理システムは稼働できないのか。

A. その通り。

Q. 本日に改修作業は完了するのか。

A. 当該エリアの空間線量が高いという問題もあり、本日に完了できるかどうかの確証はない。

Q. 処理水による原子炉への注水は実施できているのか。

A. バッファタンクには昨日の報告時点で2,688m³あるので、注水に関しては問題なく実施できている。淡水化装置についてはアレバ除染装置とは関係なく運転できている。

Q. 3号機窒素封入作業に関する地元自治体への説明は、原子力安全・保安院の了解を得た後に実施したのか。

A. 報告書を提出した段階で地元自治体へ作業内容の説明を行っている。

Q. 周辺環境のモニタリングの強化は実施するのか。

A. 既に設置しているモニタリングポストの継続監視、およびモニタリングカーを3号機から風下側に移動させサンプリングを行う予定。

- Q. 窒素封入作業では作業員が建屋内に入り、バルブを開ける作業を行うのか。
 A. 原子炉建屋外側の線量低い部分での作業であり、作業環境の線量は高くない。

- Q. 本日午後8時までの行う作業は。
 A. 実際に手順確認等を行うと思うが、工事自体はない。

- Q. 樹脂性継ぎ手が耐圧性に優れていないと思うが、設計段階でステンレス製にしている理由は。

- A. 薬液が酸性の液体であるので樹脂製の方が耐食性が高いと考えていた。亜鉛メッキ
 鋳鉄で腐食した経緯もあり、最終的にステンレスになった。今は適切と判断している
 が設計時は樹脂製でよいと判断した。なお、圧力差というよりも、ねじ切り込み部に
 過大な力がかかって亀裂が発生したと考えている。

- Q. ホース自体が樹脂性であるため、接続部に力がかかりやすかったのではないかと。

- A. フレキシブルに配管を引き回す関係でホースにしたもの。上方向から垂直に挿入し、
 横向きに力が働かないような接続方法も可能であったと思うが、現時点で切断の原因
 については不明である。

- Q. 汚染水処理の稼働率が79%で目標の80%を下回っている影響はどうか。滞留水の
 年内の処理が難しくなるのではないかと。また、稼働率が下がることによって注水量
 を上げて原子炉の冷却させることに時間を要するのではないかと。

- A. 昨日公表した稼働率は約73%なので、目標とする80%、8月以降の想定である
 90%に比べて若干低い状態である。

短期的に見るとタービン建屋の水位の目標値 O.P.3,000mm に到達する時間はこ
 れまでより長くかかると見ている。現時点で予測に雨水の影響を大きく見込んでい
 ないため、万一、豪雨が発生した場合はタービン建屋の水位が急激に上がることが
 考えられるため、O.P.4,000mm に対して1m程度の余裕をもってO.P.3,000mm を目
 指している。急激な天候変化に伴うリスクを許容する期間が若干延びると見ている。

滞留水 20 万 t の年末までの処理見通しはまだ変更していない。

稼働率は今後上昇することもあり、タービン建屋の水位が下がっても堰や堤防や
 部屋で仕切られている箇所もあるので一様に下がるものではないと思っており、そ
 ういったことを確認しながら水の吸い出し方を検討しなくてはならないと考えてい
 る。

従って、現時点で年末までの処理見通しを変更していない。

- Q. 淡水化の蒸留装置の設置状況は。

- A. 淡水化処理装置は現在も順調に動いているが、蒸留装置の建設は8月の第一期工
 事を進めたいと考えており、10月に第二期工事が完了する予定。

- Q. 福島第一原子力発電所で使用されているロボットはどのような物があるか。

- A. アイロボット社のパックボットが2台、キネティック社のタロンが2台、ボブキ
 ャットが1台、アイロボット社のウォーリアーが1台、ブロック社のB90が1台、330

が1台、千葉工科大のクインスが1台。また JAEA の JAEA 3 号が待機中である。

Q. これらのロボットはどのくらいの距離の遠隔操作が可能か。

A. 有線の操作なので 100~200m程度だったと思う。

Q. 柏崎刈羽原子力発電所の防潮堤建設の考え方は。以前、防潮壁を一部取り止めるという話があり、地元が反発したという経緯があったと思うが。

A. 当社の説明があいまいな所があり、防潮壁の設置を取りやめるという報道がなされたが、当社としては防潮壁設置を撤回したことということはない。防潮壁や防潮堤は計画に従って確実に建設していきたいと考えている。

当時は、15mの高さまでにある建屋の吸排気口に防潮板を先行して設置しており、一部で、防潮壁は必要ではないというような不十分な説明があったが、防潮板、防潮壁、防潮堤の三段階の構えで津波対策を考えている。

Q. 現在の津波の高さはどう見積もっているのか。

A. 基準があるわけではないが、柏崎刈羽原子力発電所においては土木学会の指針に基づき津波の高さは 8.3m と評価していたが、今回の事故をふまえて、福島と同等の津波高 15m に対する対策を講じることとなる。

以上